(書式3)実施報告書

議　長

令和2年10月21日

市民グループ未来の会
会長 前川 昌也　殿

市民グループ未来の会
幹事長 大藤 匡文

実 施 報 告 書

下記のとおり実施したので報告します。

実施項目の名称	坂出市議会会派合同研修会
実施場所	坂出市役所4階 委員会室
実施日時 (期 間)	令和2年10月20日(火曜日)10時～11時30分
参加議員名	前川昌也 大藤匡文 植條敬介 大前寛乗 斉藤義明 村井孝彦 若谷修治 鳥飼年幸 東原章
実施内容の概要	研修内容 (1)講 演(70分) ・講 師 古川 尚幸 氏(香川大学経済学部教授) ・演 題 「域学連携の現状と課題 ～香川大学経済学部の取り組みを事例として～」 (2)質 疑 応 答(20分) 香川大学経済学部の古川 尚幸教授をお招きし「域学連携の現状と課題 ～香川大学経済学部の取り組みを事例として～ 」について、香川大学経済学部の取り組みを事例とした講演をいただき、質疑応答を行った。地方創生(地域の活性化)に大学生を活用した取り組みを事例として、いくつか紹介いただいた。また、大学生が活動する意義やメリット、地域には不足している若い人材力、学生には実践の場が得られるというウィンウィンの関係が成立している。最後に坂出市に期待したいことと言うことで、7つほど意見があった。 質疑応答では、地域の方との考えや思いの温度差や人集めの仕方などがあった。 参加議員の所感については別添のとおり

＊参考となる書類があれば、添付して下さい。

第２回会派合同研修会

令和２年１０月２０日

「域学連携の現状と課題
～香川大学経済学部の取組を事例として～」

講師　香川大学経済学部　古川尚幸　教授

【研修内容】

学生たちとの取り組みだけでなく、まちづくりでも小さい事から始めていく。最近話題の東京から人口流出になってきた。これまでは大都市だけが人口増加で、地方は人口減少になっていた。人口減少の中で坂出市がどうやっていけばいいのかが重要である。

人口減少社会、少子高齢化、過疎化、中心市街地の衰退、限界集落
⇩
地方創生、地方共創→地方人口減少に歯止め
⇩
定住人口
交流人口　観光での人口増はなかなか難しい
関係人口　人と人との交流
活動人口　今後の重要な課題

地方消滅　消滅可能性都市　全体の４９%の自治体
2040 年に 20 から 30 代の女性が 2010 年と比較して半分以下
⇩
地方は本当に消滅していくのだろうか。

明治大学の小田切徳美先生
人口が空洞化　人口減少
土地の空洞化　農地の荒廃
むらの空洞化　集落機能の脆弱化　むらの寄り合い、祭ができず、買い物難民、老老介護
誇りの空洞化　そこに住み続ける誇りを失う
内発的発展と外発的発展がある
◎内発的発展
地域の中でお金を動かしましょう
外でお金を使うことが多くなる

◎外発的発展
交流の鏡効果
外から訪れた人が鏡となって地域の宝を映し出す

【所　感】

人口減少社会においての、地域の役割をグローバルな視点で講義をお聞きした。その中で、ゼロサム社会という言葉を聞いたが、このゼロサム社会に陥ると、企業・行政の経営層は、さらに労働者層からの「搾取」を進めることになる。こうして、長期の不況が継続する。パイの大きさは同じで、日本の人口減少社会の中で、他所から来てくださいというだけではコスパがよくない。若い人たちが地元にとどまる社会の方がいいのではないか。特にコロナ禍になり、その課題が浮き彫りになったのではないかと感じる。

今後は大学が果たすべき役割として、社会貢献や地域貢献だけでなく、地域活性化の中核に向けて取り組んでいくことが必要ではないか。経済産業省でも社会人基礎力を養う役割に向けて、今後の若者に対しては、前に踏み出す力や考え抜く力、チームで働く力を必要としているのではないか。

総務省が提唱する域学連携については、特に地方としては必要だと感じた。大学生と教員が地域の現場に入り、地域の住民やNPOなどと共に地域の問題解決、活性化、地域の人材育成に資する活動である。もちろん今までも、そういった活動もされてはきたが、特に行政としても、そういった観点から共に協力していく姿勢が必要ではないか。地域と大学にとっては学生や地域住民の人材育成にもつながってくる。その上、学生が主体となった活動であることにより、この地域だけでなく、地元に帰っての活動にも大きく貢献できる。また自ら財源を稼いでいること、住民が主体となった活動であることにより、行政に頼り過ぎない社会が構築されてくる。

課題としては地域にどう理解してもらえるのか、域学官連携をどうしていけばいいのかが出てくるが、行政として、こういった取組にも積極的に参加協力することで、活動が浮かばれてくるのではないか。その時にこそ、域学連携の結果が更に深まってくると感じる。地道な活動ではあるが、若者を育て地域の人材を元気にするにはこういった方法が一番たいせつなのではないかと感じている。

市民グループ未来の会
植條　敬介

【所　感】

今回の研修は、社会背景においてなぜ地方創生なのか、また、大学を取り巻く状況において大学が果たす役割について、そして、大学において今取り組んでいるプロジェク

トについての説明、そして、これらの活動を通して自負していることの説明をいただき、今後の坂出市に期待したいことをお伺いし、はじめのとりかかりと小さなことからでも進めていくことを再確認した。

また、人口減少問題については、若者たちを地元にとどまらせるか、そういった地域にするために、そこに住んでもらえる意味や誇りを持っていただくように内発的発展と外発的発展を考えていく努力をしていく必要性を感じた。

大学の取組状況については、まず、アクションを起こす。そして考え抜く力、チームワークによって継続していくことにより、取り組んでいることは参考になるし、若い人たちの実行力を、我々も見習っていく必要性を感じた。一つからでも出来ることから行動を起こし取り組んでいきたいと思う。

最後に、坂出市に期待したいことについて、観光資源、空間資源、人的資源として、瀬戸大橋の再活用、コスモ石油の跡地、緑地帯、商店街の空き店舗、坂出イオン、高校・大学の活用などお伺いし、私なりにいろいろな観点から考えさせられ、坂出市においては今一度再認識し、坂出市のいろいろな場所や取組について、これから取り組むべき課題を早急に発見して取り組んでいきたいと思う。今後の研修については、まちづくりについてテーマを絞っての研修ができればと思う。

市民グループ未来の会
会　長　　前川　昌也

【所　感】

社会背景なぜ地方創生なのかから始まり、地域社会の抱える課題として、主に人口減少、少子高齢化、中心市街地の衰退、過疎化、限界集落などの対策として、東京一極集中の是正が急がれ、地方の定住人口の増加の課題、交流・関係・活動人口の増加といった聞きなれない言葉も出てきている。増田寛也氏の市区町村が消滅の危機や小田切徳美氏の人・土地・むらの空洞化、そこに住み続ける意味や誇りが失う地域社会の現状があることを示している。

また、大学が果たすべき役割の人づくりなど学生たちが取り組んでいるプロジェクトの紹介があり、学生が主体となって自ら財源を稼ぐことが持続可能な活動となっている。いい体験をしていると思う。

坂出市に期待したいこととして、観光資源＝瀬戸大橋の活用、空間資源＝コスモ石油跡地・緑地帯・商店街空き店舗・坂出イオンの活用、人的資源＝高等学校・大学の活用などの提言があった。前に踏み出す力・考え抜く力・チームで働く力など、社会人の基礎力が私たちにも問われていると思う。

市民グループ未来の会
幹事長　　大藤　匡文

【所　感】

域学連携を進める上では、まず学生の活動と地域の課題や住民の意向がマッチングしている必要があると感じた。

また、域学を牽引するためには、地域・大学の双方に於いてキーマンが必要と言える。学生だけでは、活動にかかる予算管理や地域の方への理解に関して限界があるため、地域・大学双方において、域学連携の中心となる人物が必要である。

次に、より定期的かつ活発的に域学連携を行うためには、大学と行政において組織的な関係づくりが必要であると思われる。大学・地域における双方の意図を整理し、何ができて、何がやりたいのかを地域・行政・大学でしっかり把握することが重要である。

そのためには地域と大学をつなぐ人材を中心とした事務局体制を確立して、窓口を明確にすることで、円滑に地域と大学をつなぐことができるだけでなく、受け入れ等の事務手続きが円滑になる。事務局に於いて、学生が地域での活動を展開するにあたっての連絡調整や、活動プログラム決定の際のサポートを実施することで、教育効果と地域貢献の両立を図ることができ、より恒常的で有意義な活動が展開されると思われる。

市民グループ未来の会
大前　寛乗

【所　見】

人口減少が進む中、地方創生・地方共創ということで各自治体が取組んでいる。

小田切徳美氏（明治大学）は、①人の空洞化、②土地の空洞化、③むらの空洞化、④誇りの空洞化＝そこに住み続ける意味や誇りを失うという４つの空洞化があり、中でも誇りの空洞化が問題であると指摘され、それを内発的発展（参加の場づくり、お金を地域で循環等）及び外発的発展（外からの訪問者が鏡となって地域の宝を映し出す）によって住民が誇りを取り戻す必要があると言っている。その為に、まずは、若者が地元に留まることができる地域を目指すことが重要だと言っている。

私自身、誇りの空洞化という言葉は初めて聞いた言葉であったが、大いに共感できる。

古川教授は、学生が実施している様々なプロジェクトにアドバイスをし、また自らも取り組み成果を挙げているが、そのコンセプトは①学生が主体となっていること、②学生自らが財源を稼いでいることと話された。それを坂出市のまちづくりに置き換えて、「住民が主体で、自ら財源を稼ぐこと」が成功のポイントだと力説された。最後に坂出市は、課題となっている①観光資源として瀬戸大橋、②空間資源としてコスモ石油跡地、緑地帯、空き店舗、イオン坂出、③人的資源として高校・大学を活用することを期待したいと言われ講演会を終えた。

古川教授は本市のご出身で、市の事業であるニューポートプラン等にも重要な立場で参画されているので、本市のまちづくりに的を射た講演をいただいたと思っている。また、今回は第１回目でこの後も引き続いて講演をお聞きしたいと願っている。

市民グループ未来の会
斉藤　義明

【所　見】

１．全般

本研修を通じ、人口減少・少子高齢化・市街地の衰退等、現在の日本社会が共通に持つ問題の解決の一端、地方創生・地方共創の意味、そして空洞化（人口、土地、むら）社会における誇りの空洞化の厳しさを感じ取った。また、こういう社会現象の中で大学そのものの従来から役割と地域貢献という分野への挑戦、まさに社会人基礎力即、域学連携の意義について理解し、今後のまちづくりの参考、資を得た。

２．まちづくりの本質と地方創生・地方共創の必要性

まちづくりの難しさは、大きな事業としての思いが強く、民意・計画・実行・財政等を早急に統一して作り上げる事の困難さ、よって小さなことから始め大きく育てる事も重要なポイントとして反省も含め改にした。また、地方創生・地方共創という観点でみれば、人口がポイントになり、定住・交流（観光）・関係（その地域に関係する人々）・活動（その町が好きで、地域のために活動する人々）等それぞれの人口の意味と獲得の努力が必要であり、本市のまちづくりにそれぞれの人口の増加への姿勢について考えるものである。

３．新しい大学像、果たすべき役割の発見とまちづくり

大学がこれまでの教育・研究にとどまらず、地域貢献まさにその中核になるべく社会人基礎力（アクション・シンキング・チームワーク）を養っていること、それがまさに「域学連携」であり、地域の問題解決または地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化・人材の育成に資する活動の一部に触れられた事は大きな成果と考える。この際のポイントが、これらの活動が学生主体で自主的であり、自らの財源（稼ぎ）あるゆえ継続が可能という点、ひいては、まちづくりのポイントは市民が主体となった活動であり、自ら財源を稼いでやる事が成功の秘訣とまで言い切った点に、何かしらの意味を感じた。

４．結言

本市が抱えるまちづくりの課題に照らし合わせれば、潜在的に持っている資源を生かすため、行政と市民がそれぞれの責務の完遂と域学連携・地域おこし協力隊員等、新しい部外力の活用及び厳しい財政状況等への対応とともに、しっかりしたまちの将来の姿を描き、組織の縦割りにとらわれず、実現のための道筋を確立したいものである。

市民グループ未来の会
村井　孝彦

【所　感】

研修会に参加して一番に気になったところが、講演の最後に先生がお話された坂出市に期待しているところで、一番にあげていた観光資源としての瀬戸大橋の活用です。瀬戸大橋は、鉄道道路併用橋としては世界最長で「世界一長い鉄道道路併用橋」としてギネス世界記録にも認定され、さらに日本の２０世紀遺産にも選定されています。また、瀬戸大橋の周りに広がる瀬戸の島々も素晴らしい観光資源です。この二つを全く活かしきれていないと感じます。多くの方に瀬戸大橋と言えばすぐに坂出と答えていただけるように積極的に活用することで、本市の良いイメージを定着させることに繋がると考えます。

市民グループ未来の会
若谷　修治

【所　感】

第二回目の会派合同研修会は、「域学連携の現状と課題」をテーマに、研修会を開催いたしました。

2014年、地方創生「少子高齢化の進展に的確に対応し、人口の減少に歯止めをかけるとともに、東京圏への人口の過度の集中を是正し、それぞれの地域で住みよい環境を確保して、将来にわたって活力ある日本社会を維持していくことを目指す」が開始され六年が終わろうとしています。今年７月、コロナ影響か？どうなのか分かりませんが東京圏より初の人口流出がありましたが、今後、東京一極集中の是正になっていくのかは見守る必要があります。

本市では「働きたい、住みたい、子育てしたい、共働のまち」を掲げて取り組んでいますが現状はと言いますと、やはり人口減少に歯止めがかからない状況が続いているといえるでしょう。

私が古川先生にお会いしたのが五年前、坂出商店街の土曜デーに香大生とともに先生も一緒に活動されていました。その時は何故と言う言葉しか思いつかなかったのですが、「域学連携」の講演を聞くことで理解できたとともに、まちづくりの意義についても学べたことは非常に参考になりました。しかしながら自分自身の考えがまとまらない。まちづくりとは人々の賑わいと活気だと思っています。

目指すところは本市の発展ですが、何をどうすればいいのか具体的な施策が見当たらない。土曜デーに参加しているが香大生が楽しんでいる姿をみて思います。私自身が前向きにそして、楽しく、一生懸命に取り組んでいかなければならない。

市民グループ未来の会
鳥飼　年幸

【所　感】

香川大学経済学部の古川教授をお迎えし「域学連携の現状と課題」について、大学の取組を事例に講演があった。古川教授自身、坂出市出身ということもあり、坂出市の現状もある程度ご存じで、話としてはすんなり入ってきた。

増田寛也氏の「地方消滅」や小田切徳美氏の「人、土地、むら、誇りの空洞化」については、すべてが地元王越町に当てはまり、内発的発展と外発的発展が示されてはいたが、いざ地元に当てはめると難しい問題ばかりであった。

今、進んでいるプロジェクトは学生自身が財源を確保し、大学の支援がなくても継続可能になってきているが、失敗した事例もお聞きしたかった。成功のためのポイントとして、学生が主体となった活動であること、自ら財源を稼いでくることが上げられ、学生の部分を住民に置き換えると、地域創生のポイントとなる。しかし、それが出来ないから過疎化してきている。過疎化するから、商店やGS民間企業が成り立たなくなっている。しかし、大学生が活動することで地元住民同士の潤滑油になっているのも確かで、市外や県外に出ている孫が帰省しているかのような目で学生たちを見ていた記憶がある。しかし、学生たちがいなくなると衰退の道をたどってしまう。高齢者といっても元気な方は田畑や趣味、簡単な仕事をしているのと、大きな問題は高齢化が進む地域において、市長の言う「共働のまちさかいで」による自治会のボランティアが多くなり、ボランティア疲れが生じている。無償で働きたくはないが、それほど欲があるわけでもない。「若い者が動いて地域を守っていってくれ、しかし口は出すぞ」と言うのが多くの人生の先輩方である。

教授のように、周りに若者しかいない環境と、周りに高齢者しかいない環境では大きく違ってくる。今回の講演でお聞きした内容は、プロジェクトや大学生の力（純真な活動）は素晴らしいものであったが、高齢化が進む地元にある大きな壁を再確認させられた内容でもあった。

市民グループ未来の会
東原　章